

会 議 録

1 会議名

第4回上越市観光振興計画策定検討委員会

2 議題（公開・非公開の別）

- (1) 第2回観光地域づくりワークショップの実施報告（公開）
- (2) 計画案について（公開）
- (3) 意見交換（公開）

3 開催日時

令和元年11月27日（水）午後2時から

4 開催場所

ミュゼ雪小町 多目的室1・2

5 傍聴人の数

1人

6 非公開の理由

なし

7 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

- ・委員：丁野朗、平原匡、中牧俊明、齋藤光雄、板垣朗、南博幸、亦野潤一、
今井圭介、上原みゆき、笹川枝里子、山下智史、北嶋宏海
(欠席2名)
- ・事務局：産業観光交流部 市川部長、観光交流推進課 吉田課長、岩野副課長、
小池副課長、五十嵐係長、虎石主任、見波主任、小林主事

8 発言の内容

【小池副課長】

※配布資料の確認、概要説明

それでは、議事に移りたい。丁野委員長、進行をよろしくお願いしたい。

【丁野委員長】

この委員会は8月に始まり、今回が最終回である。これからの上越の活性化にどうつながっていけるか。率直な意見をいただきたい。

次第に沿って進める。まずはワークショップの実施報告について、事務局から説

明をお願いしたい。また、ワークショップに参加した人、オブザーバーで参加した人もいるので、感想などを聞かせていただきたい。

ー (1) 第2回観光地域づくりワークショップの実施報告ー

【小林主事】

※「資料1 第2回観光地域づくりワークショップの実施報告」に基づき説明

【丁野委員長】

どの地域でも、「観光というのは一部の事業者がやっているもので、自分たちは関係ない」という意見があるが、こういうワークショップをやってみると、いろいろなことができるかと改めて皆さんが感じられたように思う。参加した人が3人いるので、感想を聞きたい。

【亦野委員】

グループワーク①について、事業者としてではなく、「イチ個人」で観光を考えることは非常に意義があった。事業者の立場であれば、上越の観光について知識として知っている前提で、それをどう発信していくかという話になるが、「イチ個人」として考えたとき、そもそも「知らない」というところにかなりフォーカスされた議論になった。私のグループでも、そもそも知らなければSNSで発信もできないという話になった。

あとは、グループ編成について、全くの異業種で、関わりのない人とワークをやってもあまり意味がないと思う。割と近い業種や関わりのある人とワークを始められれば、点と点がつながりやすいので、そういったグループワークの進め方が有効ではないか。

【丁野委員長】

そうなるとう一種の起業塾のようなものになる。かなり具体的に事業を作り出していこうということも狙える。

続いて、笹川委員。

【笹川委員】

グループワーク①で、普段「イチ個人」として思っていることを他の皆さんと共有して、「やっぱりそうだよね」と共感できたのが嬉しかった。まず、自分自身が

楽しむというところが大事であり、楽しいからこそ友人や他の人に自慢したくなり、発信したくなる、という話を共感できたのがとても良かった。

また、自ら草刈りや清掃などに取り組む人もいて、参考になった。

グループのメンバーは業種も様々だったが、ワークショップの後日にグループのメンバーから、せっかくなので何か一つでも体験みたいなものができたらいいということで、一斉メールを送ってもらい、集まることができた。とても楽しく、これからもこの関係は続いていきそうだ。

【丁野委員長】

参加者のうち、女性は何人だったか。

【小林主事】

22人のうち、3、4名ほどであった。

【丁野委員長】

参加する女性の比率をもっと高めるとよいのではないだろうか。

続いて、北嶋委員。

【北嶋委員】

仕事としてできることよりも、「イチ個人」としてできること、という部分が非常に面白かった。地元のことをあまり知らないため、自分で知ろうと行動してみる、探してみるという意見が印象に残った。

また、お客さんと思われる人には必ず声掛けをし、そこからコミュニケーションを作る努力をしよう、という話もあった。

最後に、親戚や遠戚、友人だけでなく、自分の家族あるいは子どもに対して、地域のいろいろなことを家庭の中で教えてあげることが、観光の取組になるという意見もあって、非常に参考になった。

【丁野委員長】

えちごトキめき鉄道でも、社員が個人としてどんどん出てくるというやり方もあるかもしれない。

続いて、見学した南委員。

【南委員】

前回も話したが、観光は基本的に楽しいものでなければいけないと思っており、ワークショップに参加した皆さんも本当に楽しそうに意見交換、協議していたなど

いうのが非常に印象的だった。

具体的な内容について、こうしたワークショップを通じて、立場の違う人が意見交換することで、次へのつながりだとか、新たな発想、新たな事業展開が生まれてくるのかなと思う。ぜひ継続していただきたい。

また、ビジョンを策定するということでのワークショップだったが、ビジョン策定後、アクションプランに移っていく過程で、いろいろな人との意見交換から発想を見出していくことが非常に大切であり、誰が参加するかはこれからの協議にもよるが、今後も継続してもらいたい。

【丁野委員長】

事務局に聞きたいのだが、今回は高校生や先生などには声をかけなかったのか。

【小林主事】

意識はしていたが、今回は、前回の参加者を中心に、日ごろから付き合いのある人や、紹介してもらった人を集めた。

【丁野委員長】

高校生が頑張っまちづくりや観光に取り組む地域が非常に増えてきており、とても良い成果が上がっている。今後考慮した方がよい。

今の発言を聞いて、その他の意見はあるか。

何か気づいたことがあれば、後でもよいので意見をいただきたい。

続いて今日のメインとなる議事2の計画案について、事務局から説明を願いたい。

【見波主任】

※「資料2 論点メモ」「資料3 (仮称) 上越市観光交流ビジョン (案)」に基づき説明

【丁野委員長】

今回は、前回の「基本計画」という考え方を変え、「ビジョン」、つまり市民が共有して一緒に何か作り上げていく、そういったものを作っていこうということで、計画案の第1章は力作である。ただ、やはりこのビジョンを作って、当然これを動かしていかなければならない。そうなる次ステップであるが、アクションプランを毎年ローリングしながら、そこに予算も付けていくというようなことになっていくと思う。一連の議論なので、先にアクションプランがどのようなイメージにな

るかということ事務局から説明願いたい。

【五十嵐係長】

※「参考資料 2-1 アクションプラン体系図」「資料 2-2 アクションプラン掲載イメージ」に基づき説明

【丁野委員長】

計画案の 28、29 ページにいわゆる取組の方向性が出てくる。これは、ビジョンを動かしていくための基本方針に近い部分である。この 4 つの方向性に沿ってアクションプランの体系図があり、資料はあくまでイメージだが、こういう構造になっている。

今回のビジョンは、市民や事業者が動いていただくために、「観光は私には関係ない」ということでなくて、地域全体として新しい動きを起こしていこうという呼びかけになる。では、その呼びかけを受けてどういう方針でいくのかということがあるので、第 2 章に入ったときにデータが改めて出てくるのは違和感がある。だから、もう少し 28、29 ページをしっかりと書いておくということが、第 2 章の肝になると思う。全国的に見てとてもユニークな作り方なので、一つの先行モデルになると思っているが、どういう地域を作っていくのか、という方向性には触れなければならない。次のアクションプランにつながっていきにくいところもあるので、こういった点も含めて、各委員からそれぞれ 4、5 分ほどで意見をいただきたい。

まずは中牧委員。

【中牧委員】

前回の案では、「ありたい姿」という記載があったが、今回の案には見当たらない。委員長が話したように、まずはありたい姿があって、基本理念や合言葉があるべきで、前回委員会でも言ったとおり、4 年後の計画も大事だが、その後の 10 年、20 年後の長期の「ありたい姿」もどこかに書いていただきたい。

また、インバウンドが増えているという記述が多くあるが、当然上越市でもインバウンドを推進していくという方向でよいか。そうであるならば、もう少しインバウンドを推進していくという観点での記載が必要と考える。例えば、視点 1 の「交流のまちとしての優位性」という部分や、視点 4 の「来訪者が求めていることを届ける」という部分にインバウンド関連の話を少し盛り込んだ方がよいだろう。

その他修正をお願いしたい部分があるが、細かな点なので、後ほど事務局に伝えたい。

【丁野委員長】

その他細かな記述などに関しては、後で直接事務局に伝えていただきたい。

続いて齋藤委員。

【齋藤委員】

まずは、ワークショップなど、市民の意見を吸い取りながら、短い期間で計画案をまとめた事務局に敬意を表したい。

さて、計画案の項目1～3について、いわゆる導入部分にあたるが、読んでいくと長く感じる。もう少しコンパクトにまとめてはどうか。

また、現状認識の部分で、以前紹介のあったSWOT分析は入れないのか。

次に、1ページの中に「価値観を広く共有するための“ツール”」と記載があり、同感であるが、これにとどまらず、上越市の観光の方向性を示すということも盛り込んだ方が良いのではないか。

次に、16ページの合言葉について、素晴らしい考え方だと思う。ただ、「～だから」というところで切れると若干違和感があるので、例えば、「私たちは観光交流を大切にし、楽しみながら広げます」という文章を合言葉に加えてもよいのではないか。

次に、18ページからの「観光に取り組む各担い手（プレイヤー）が意識したい共通の視点」について、もちろんその担い手の中には行政が入っていると思うが、「担い手が～」という記述にすると、何か人任せのような印象を受ける。例えば、「ビジョン推進にあたっての視点」と、軽く書く方策もあると思う。

続いて、「6. 地域一丸となって同じ方向で取り組みましょう」は、委員長からも話があったが、私も同感であり、もう少し充実させた方が良く考える。

最後に、地域一丸となって、皆で取り組むというのは非常に大事だが、やはりそれをどう推進していくかということもあった方がいい。図でなく言葉でも良い。

「皆で連携して」や「一丸となって取り組んでいく」というビジョンの推進に係る項目があってもいいと考える。そうすると19、20ページに記載してある担い手の部分も、その項目の中で進めていきますという風にしてもいいと感じた。

【丁野委員長】

大事な視点をたくさんいただいた。

第1章が長いというのは、皆さんもそう感じているかもしれない。第1章の1～3は導入部で、4から基本理念や基本方針が示されている。先程、6は方針と言ったが、さかのぼると4から入っていると感じる。組み立てについて事務局の考えはどうか。

【吉田課長】

我々も導入部分が長いと感じているが、思いを持ってこれまでの経過の中でまとめた。バランスの面もあるため、今後の成案に向け、検討したい。

【丁野委員長】

ここで章立てを変えることもありうる。思いを語ってもらうのも素晴らしいが、4からは理念になる。その後6に方針というか方向性が出てくると、一つのまとまりになるかもしれない。

続いて板垣委員。

【板垣委員】

前回は発言したが、20ページの中で、「地域一丸となって取り組む観光地域づくり」という記載もあり、上越市の観光ビジョンではあるけれども、上越地域、例えば糸魚川、妙高と連携していくというようなことも記載することが重要と考える。

また、20ページの図中に、「観光協会」「商工会議所」等とあるが、商工会もあるので、ぜひ入れていただきたい。

全体の流れの中で、28ページにアクションプランを単年度ごとに策定、検証していくとあるが、この具体的な方法は、現在どのように考えているか事務局に聞きたい。

【吉田課長】

ビジョンは4年間で、各事業については単年度ごとということであり、単年度の中で総括をするよう考えている。また、予算も含めて、次年度について年度の中で検討していくというようなローリングをしていきたいと考えている。

【丁野委員長】

「アクションプラン」というと大きくなってしまっているので、「アクションプログラム」とした方が良いのではないか。観光庁も、「観光ビジョン」と「アクションプログラム」という形でやっている。「プログラム」の方が、具体性があり、良いかもし

れない。

続いて南委員。

【南委員】

全体の構成については、事務局が検討して構成したと思うので、私からは特に意見はない。

はじめりが「なぜ～」という問いかけになっており、面白いと感じる。

それからキャッチフレーズ、基本理念ということで、合言葉として非常にやわらかくていいなと感じた。先程も話したが、観光は楽しい、というのが基本だと思うので、そういった工夫を凝らしたもので非常に良いと考える。

これまでの協議の中で、子どもの教育というか、地元愛の育成の意見が多々あったが、その視点はどこに入っているか。担当する部署が教育委員会だが、どう整理したのか、教えていただきたい。

それから、他の委員からも話が出ているが、28ページの今後のアクションプランの策定、検証の方法について教えていただきたい。これは市直営で行うのか、それとも委員会を作って進めていくのか。できれば、検証の部分は重要なので、検証の方法について、先の話になるかとは思いますが、今の考えを聞きたい。

【丁野委員長】

板垣委員とも同じで、このアクションプログラム、あえてプログラムと言うが、これからどういう形で策定していくのか、もちろん今は想定でしかないと思うが、聞きたいということである。

それからもう一つ、観光教育の話があった。確かに何度か意見が出ているので、この記述について、どこに記載されているか、事務局に説明を求める。

【見波主任】

教育の部分について先回、笹川委員からの高田高校の事例をはじめ、いろいろと意見をいただいた。ビジョン全体をコンパクトに分かりやすくということもあるため、どこに書けるか悩んだ結果、10ページの真ん中あたり、「10年後どんな観光地域にしたいか」というワークのところで記述した。

どんな観光地域にしたいかということ、来てもらった人に対してと、住んでいる私たちにとってという二つの切り口でワークを行ったが、住んでいる私たちにとって、特に、子どもたちが残りたいと思えるようにしたいとか、小さいうちから地

元愛を育てることが大切だとか、教育的な観点で話し合っている様子が多く見受けられた。子どもたちが育つ過程で、家庭と地域、学校とが一体となって、子どもたちに歴史や文化、自然を伝えていくことも長期的な視点で観光地域づくりに大切だと考える。このような形で触れることで、委員からの意見を反映している。

【吉田課長】

補足すると、今のところは非常に重要な視点ということで皆さんから議論していただいております、コラムの中でいいのか、本文の中がいいのか、また「観光教育」という言葉も出ているので、どう記述していくか今後検討していきたい。

また、アクションプランについて、現状ではプランと呼んでいるが、この検証については、指摘のあったとおりワークショップの中でローリングしていくというイメージも持っている。ただ、具体的にどのような形で、どのようなメンバーでというところについては、まだ定まっていないが、ワークショップを活用していきたいと考えている。

【丁野委員長】

続いて亦野委員。

【亦野委員】

このビジョンが、具体的に各プレイヤーに動いていただくための呼びかけにもなりうるということで、私は観光に携わって年数が浅いため、知識も少なく、そのような立場からまっさらな気持ちで読んでみて、納得できたというか、ようやく飲み込めたというのが23ページの視点3からだった。自分の地域のこと、ということで納得できたのかなと感じた。

先程、第1章の長さについて話があったが、前半部分はなかなか自分の中に入っていないというか、上越とリンクしてこなかったが、23ページの視点3で、上越の課題というか、「地味」という言葉もはっきりと書いてあるが、ここで上越がどういうものか知った上で、さらにどういった歴史、文化があるのかを頭にインプットした上で最初から読み直すと、上越とつながりながら読めたように感じる。極端ではあるが、上越には、そもそもどういう課題があって、歴史、文化があるということを読んだ上で、この第1章に入っていくと、すべてがその上越をイメージしながら、自分の立ち位置とリンクさせながら読んでいけるのかなという印象を受けた。

もう一点、19ページに図が載っているが、上越を全体として見たときに、どう

いった体系の中で観光振興に取り組んでいるかということを示すものがあると、自分の立ち位置もわかる。また、どこが主体になって動いているというのが結構分からないことがあるので、そこが明確になってくると、統率というか、組織としての動き方が決まってくるため、大切な部分だと考える。

【丁野委員長】

組織をどう表現するか、20ページに「地域一丸となって取り組む観光地域づくり」という図もあり、これは実は行政一丸となってということでもあると思うが、経験上大体わかっている人と、分からない人がいると思う。事務局に聞きたい。

【吉田課長】

見せ方という部分では非常にテクニカルな部分もあるので、できれば具体的に亦野委員から話を聞きながら、見せ方について、また少し検討していきたい。

【丁野委員長】

続いて今井委員。

【今井委員】

前回欠席していたので、少し把握しきれない部分がある前提で話すが、全体のページ数が前計画から半分ほどになっているということで、かなりコンパクトになっていると思って読んだ。

なぜ上越市が今改めて観光に取り組むのか、という点に関して、経済的効果を求めて取り組む、と記載すると良くないと思うが、上越の気候や風土、食を多くの人に伝えたいから取り組んでいる、というようなフレーズがあった方が良い。最初のところに、市民の誰が読んでも簡単なフレーズがあると、その先を見たくなるようになり、資料の入り方としてはいいのではないか。

細かな資料も載っており、観光の役に立つ内容になっているため、やはりそれを何のためにやるか、と言われたときに、シンプルに解説するものがあれば、市民、行政含めて、まとまっていけるものになるのではないか。

あと、先程教育の話が出ていたが、当社にも最近小・中学校、高校と、学校単位の見学が非常に増えている。先生になぜ当社に来るのか聞いたら、地元にあるものを再発見するために、皆で見に行き、体感するということが、郷土愛や、自分たちの住んでいる地域を理解することにつながるからとのことである。当社は酒類を扱っているのですが、学生は商品を買わないが、空気感や、地元でこういったものに触

れたという体験が記憶にも残る。地元愛を育む中で、地域の歴史や産業を学ぶことは、観光の面でも役立つというか、実践できると考える。

【丁野委員長】

今の点は8ページの観光がもたらす効果のところでも触れられているが、経済的効果、社会的効果、どちらかに偏りすぎても駄目だという、このとおりだと思う。

実際、地域のリーディングカンパニーに頑張ってもらわないと観光はなかなか推進できないというのも事実なので、ぜひ頑張っていたきたい。

続いて上原委員。

【上原委員】

素晴らしい案だと思い、感銘を受けながら読んだ。何点か意見を述べる。

今井委員も話した教育ということでは、地元愛というのは10ページに記載もあるが素晴らしいことだと思う。名立区の宝田小学校の児童が平成24年に、名立区のキャラクター「名五美ちゃん」を考案して以来、そのキャラクターをスクールバスにラッピングする取組があった。また、うみてらす名立を通過して東飛山まで行く東飛山線について、今は市営バスになっているが、この各バス停の全ての標識を、小学校の児童が、高学年から低学年まで力を合わせて、そのバス停がある場所ごとの地域の歴史と特徴を良く学習した上で、標識にしたという話を聞き、感動した。ぜひ見てみたいと何回も行ってきたが、キャラクターを通して、宝田小学校の皆さんが名立区の歴史を愛しているのが伝わった。

岩の原葡萄園についても、高士小学校の児童が頑張っていて川上善兵衛翁のことを学ぶだけでなく、ぶどうの栽培にも熱心に取り組んでいるということを知り、上越市では地域に根差した学習に熱心に取り組んでいると聞いている。

また、23ページで、上越市の魅力を「他地域と同種のものでも『深さを備えている』もの」という記述があり、確かにそう思う。その一方で、他の地区の魅力が深さを備えていないか、というとそうではないと思う。書き方を工夫した方がよい。他と比較して「良い」と言っているようで、あらぬ誤解を受けないような書き方が望ましいと考える。

16ページの合言葉に関して、分かりやすい言葉でよいと思う。その反面、「～だから」で終わると少し座りが悪いというか、先程意見もあったように、「私たちは観光交流を大切にし、楽しみながら広げます」というのも合言葉として良いと思う。

【丁野委員長】

このキャッチフレーズは、齋藤委員からも指摘があったように、いろいろな人が注目して見る部分なので、「観光は楽しいものだから」だけであると、若干ぶっきらぼうかなという感じを持つ人もいる。サブタイトルが入っても良いかと思うが、市川部長の考えを聞きたい。

【市川部長】

「私たちは観光交流を～」の一行は、これが結論的なものであるが、それを合言葉にしたときに、頭に置いておくには長すぎると思った。「観光は楽しいものだから」の後ろには、ひょっとしたら人それぞれにもっと座りのいい言葉があるのかもしれないし、謎かけではないが、多様な考えをこの合言葉の後ろにつけてもらってもよいというアイデアである。ただ、皆さんの意見も踏まえ、この「観光は楽しい～」の下に一番下の「私たちは観光交流を～」をサブタイトルに置くという手法もあろうかと思うし、何か他のサブタイトルがあった方がいいかもしれない。

【丁野委員長】

検討いただきたい。

続いて笹川委員。

【笹川委員】

とても読みやすく、企業人としてではなく、普通の一市民としての目から読んでもストーリーがわかり、なぜ上越市として観光に取り組むか分かりやすいと思った。市民プレイヤーを増やすと考えたときに、1ページに、例えば、市民にとって、なぜ上越市が観光で発展するとよいのか、などの記載があると良い。

もちろん経済的に、企業に収入があると、経済が回るというのもあるが、市民一人ひとりの感情として、インバウンドの切り口で言うと、上越という地元にいながら、例えば外国から旅行者が来て、交流したときに、あなたが「市民外交」として何か日本の代表として海外とやり取りできる、みたいな例があると、市民としては「ちょっと格好いい」と思うのではないか。

他にも、中山間地域に住む人々の普段の姿が、外から来た人にとってすごく価値のあるものという人が多くいるので、そういったことも記載したらよいかと思う。読んだ人が読んだら嬉しいかな、と思った。

教育に関して、これから10年後の未来を考えたとき、外国から労働者として日

本にたくさん人が来て、旅行者ももっと増えると考えたとき、「上越市にはこんなに良いところがあるよ」というのも大事だが、やってくる外国人の国の文化などを学ぶ文化教育や多文化共生教育も、少し観光から外れるかもしれないが、グレーに混ざりあえる部分もあると思うので、例えばアクションプランの一つの事業に、多文化共生教育に関して、外国の人との交流事業などがあるといい。

【丁野委員長】

海外の人から見たこの地域の魅力は、日本人とはまた違ったものを感じるわけで、その視点もあると良いという意見である。

それと、文化教育という、非常に大事な部分であり、教育の問題も一緒に議論をしていくというような記述がどこかにあっても良いかもしれない。ぜひ検討いただきたい。

【吉田課長】

今までの第五次観光振興計画だと、今回案で記載していないアクションプランの部分まで記載してあったため、ある意味わかりやすかったが、観光教育というキーワードも出ており、今後協議をして、今回のアクションプランには、今ほどの多文化共生というものも入ってくると現状では考えている。

また、「読んだ人が喜ぶ」という良い言葉をいただいた。そういう視点で、市民にとって分かりやすいもの、というイメージで作っているが、もう一段ステップアップして、実際にこの約50ページのものを市民の皆さんに直接配るというのもなかなか難しいので、これを要約して、もう少し分かりやすいものがあったらいいのかなと事務局で考えている。その中で、読んだ人が喜ぶというような視点も入れていきたいと考える。

【丁野委員長】

続いて山下委員。

【山下委員】

私からも、観光教育に関して、10ページのコラムの中だけで終わりにしてしまうのは、すごくもったいないし、委員長が話しているように、全国的にも珍しい、踏み込んだ形のビジョンをせっかく策定するので、委員会が始まったときから出ていた「市民参加」という話も踏まえ、観光教育という視点での本文での記載があった方が良いと感じる。

旧14市町村が平成17年に上越市に合併した。私もいろいろな自治体を回っていると、自治体の職員や事業者の中に、それぞれ合併する前の地元こそが自分の地元という意識が少なからずある。だから、主たる市役所の位置が、自分がもともといたところと違う職員は、前と様子が違うよね、と不平や不満を話すように感じる。何が言いたいかというと、大人になってからは、刷り込まれたものも多く、なかなか変わることができないということである。その意味で、やはり子どもの頃からの教育が非常に大事だと考える。郷土愛は、学校であったり、家庭であったり、地域であったりでしっかりと醸成していくことが必要だ。

群馬県の例を挙げると、「上毛かるた」というものが有名で、群馬県出身の芸能人がテレビで面白おかしく、「群馬県民は皆上毛かるたを覚えている」ということが、良い例だと思う。学校でどれほどやっているかわからないが、群馬県出身のタレントは皆さんそらんじることができるらしい。では、上越市で何をするか、というところいろいろあると思うし、教育委員会との調整も必要である。その辺りは大変かもしれないが、一方で、教育現場では地域学習や総合学習の過程で、郷土愛を醸成するような地域教育もしているのだから、それらをうまく踏まえた上で組み込んでいくと、さらに踏み込んだビジョンにつながっていくと考える。

【丁野委員長】

観光教育というのは、国も非常に力を入れている分野であり、学校教育だけでなく、いわゆる生涯学習も含まれる。大人への教育という点も含めての話だが、観光に関して、インバウンドが増えてきて、部分的に問題も起こっている。こういった問題は10年後を見据えてみると、今我々が気の付かない新しい問題も起きてくる可能性がある。特に、上越市は歴史・文化が魅力であるから、文化財の問題とか、日常の暮らしの中に外国人が入ってくるとかいろいろな問題が出てくる。そのようなこともひっくるめて、交流や観光を考えるきっかけとなってもいいかもしれない。

【市川部長】

観光教育ということで、教育は学校に任せる部分もあるとは思いますが、子どもたちの教材となる地域を育むのが大切というのは間違いないと思うので、そういったことを訴える部分をこのビジョンの中に落とし込んで、具体的にはアクションプランあるいはプログラムの中に、今やっている取組も含めて整理していきたいと考えている。

【丁野委員長】

続いて北嶋委員。

【北嶋委員】

今ほどの議論について、7、8ページで、そもそも観光とは何か、あるいは観光の効果という中で、「住んでよし、訪れてよし」と、あるいは8ページの中程にも、その地域の住民の地元への誇りだとか愛着を醸成することが観光という視点から見たときに大きな効果である、と記載されており、この辺りで記述されていることと、思っていたので、あまり違和感はなかったが、皆さんの意見を聞き、もう少し踏み込んだ教育的な視点が必要なのかなと思った。

私からは、目次を見てもらうと、先程齋藤委員からも話があったが、第1章はもう少しスリムにするか、または、1～3にするか、そして4からが第2章かなというイメージがある。特に27、28ページでは、28ページから6になり、分かりづらいため、案の第1章4～6は第2章1～3でよいと考える。

先程委員長からも話があったように、取組の方向性の部分について、例えば地元愛の醸成とか観光教育は、この取組の方向性の範囲の中に、少し膨らませて記載してもよいと思う。

【丁野委員長】

要するに構成についての意見である。

総括を平原副委員長にお願いしたい。

【平原副委員長】

皆さんの意見もごもつともで、やはり出てきたなという感じもする。

まずは16ページの合言葉の件、皆さんが触れているが、キャッチコピーは本当にプロが作ると大変な値段になるので、これを議論していくと本当にあれもこれもという風になっていくと思う。ただ、一つだけ、微妙なラインではあるが、やはり断定的な口調になってしまうとそこから始まってしまうので、投げかけという意味ではものすごく考えられた言葉だと思うが、「上越の観光を楽しもう」とか「レッツ・エンジョイ」のように、ジョインしていく感じを出した方がいい。観光は楽しいからやろうよ、という気持ちはすごくわかるが、楽しみも、上越の観光を楽しもう、というところから始めると、まさに誘客的視点から始まる。「観光は」で始めると、日本の観光という意味にも捉えられるので、「上越で観光を楽しむ」とか、「上

越の観光を楽しむ」という「上越」という言葉が欲しいと感じる。

あと、広域連携の話は、やはりどこかで触れた方がいいと思う。18ページに上越を取り巻く地図などが入っているが、新しい武道館の話もあり、スポーツ施設での誘致が必要になってきて、周辺の自治体からの誘致が非常に重要になってくるし、広域のプロモーションが大事なので、18ページ内でも触れられているが、もう少しトピックとしてあってもいい。

教育の件について、前回の委員会の延長で、皆さんがまた触れているが、上毛かるたの話があった。上越に当てはめると、上越にも「ふるさとかるた」というのがあって、我々もふるさとかるた世代だったので、岩の原の善兵衛さんの名前をそれで覚えた。そういう歴史もあるので、何か配布物を作るとよいかもかもしれない。

学生が上越や上越の観光について触れるとき、入り口は今の上越の場合、観光のまとまった冊子もあると思うが、ガイドンスとして、かるたは面白い要素だと思う。

先日、高校で講演する機会があったが、各論に入る前にガイドンスで全般的に話してくれる人がいると有難いと同じように、そういう本があると、学生はそれを読めばわかるので、何か1冊あってもいいと思った。市が出す学校教育で使ってほしい「いろはブック」というかガイドブックは、学校現場からも求められており、配ってほしいと思っているはずである。

そういうものを今後考える上でも、アクションプランの中に、教育面に触れるような部会とか、アクションプランのトピックを作って、それについて議論していく場所を設けた方が良くはないか。今回の案のA～Dに、さらにEを増やすなどして教育の話をもっと前に出していいと思う。

アクションプランの体系図が資料として出てきたが、ビジョンが肝で、こういう冊子ができて、こういう体系図ができていくというのは、珍しいことなのか。

【丁野委員長】

そうでもないが、こういう思いまで伝えるようなものは珍しい。

【平原副委員長】

そうすると、もう一回、これを元に、こちらにまた戻って会議が必要だと考える。ワークショップだけでなく、我々も委員として参加しているので、委員がメンバーとして入った形の部会みたいなものが立ち上がってきて、それ自体が後でそれぞれ並行して進んでいくというのにも必要になってくる。委員会が終わり、委員が手を放

してしまうと、そのままになってしまい、4年後作るとなるとまた戻ってくるというのは実はよくある話である。であれば、1年後にまた丁野委員長に見てもらおうかそういうことがあってもいいのかなと思う。

【丁野委員長】

最後の点は、いろいろな地域でいろいろなやり方があるが、だいたいはフォローアップ委員会を開催することが多い。進捗状況と、また新たに皆さんから意見をいただくというかたちのフォローアップ委員会はよく行われている。私が実際に策定に関わった地域も、横須賀だとか小田原だとか、1年間隔でフォロー委員会をやっている。

本当は四半期ごとぐらいにやりたいが、大体年に2回、進捗状況の報告と、新たな視点をそういう場でいただくということ、今回はアクションプランを毎年作るわけだから、回数は別としても、そういうことがもしできるならとても良いと思うが、事務局の考えはどうか。

【吉田課長】

回数についてまだ話はできないが、毎年アクションプランあるいはプログラムを作っていくという中で、今の視点を我々も持っていて、フォローアップ委員会という言葉が出たが、アクションプランをローリングする委員会のようなものも今、検討している。

【丁野委員長】

最後に、私からも感想を述べたい。今回の案は第2章から大きくトーンが変わっているが、第2章は基本的には方向性を示していくというところでもあるので、データの部分はあまり本文に書かなくても良いと感じる。

例えば、先程指摘のあった31ページの交通手段の図は、要は国全体の話であり、上越はどうかという話が出てくれば意味があるが、国全体のことを書かれても少し縁遠いという感じがする。上越のことを書くのは非常に大事なことで、実際に、交通体系がしっかりしていないと観光の受け皿もできないが、国全体の話は不要ではないか。

また、14ページに観光資源の客観的評価があるが、20年以上前から行われており、今こういう格好で評価しているということはほぼなくて、むしろRESAS(リーサス)などを使って評価するのが当たり前となっている。この客観的評価は、

日本人における団体旅行時代に有効だった評価法であると考える。

このように、うまくつながらないところがいくつかあるので、そこは事務局で考えていただき、流れを途絶えさせ、遮るような表はあまり出さない方がいいという感じがしている。

非常に画期的なまとめ方であり、いろいろなところから注目を集めるのではないかと思うので、さらにブラッシュアップして、いいものにまとめ上げていきたいと思う。

それと、他の地域もそうだが、観光というのはもちろん市民皆さんで担いでいかなければならないし、理念もそうだし、そこから新しい事業を生み出していくということも大事であるが、現実的にはリーディングカンパニーが強く引っ張っていくことが、非常に大きい。地域経済というのは、トップランナーが引っ張っていくのが現実であり、その辺りの気配りみたいなものをどこかで載せてもよい。

ある地域の観光計画だが、実際に目標値を考えると、民間事業をどこまで増やせるかと、それを積み上げていくみたいなことをやっているところもある。確実にこれだけは増やしていこうと、そういうのが見えてくると、皆もっとやろうという気持ちが出てくることがあり、やはり観光は文化的行為であると同時に、経済的行為であるという側面が強い。どちらかでなく、両方が必要で、これはアクションプランの数値のレベルになってくると重要になってくるので、バランスも考えてもらいたい。

他に意見がある人は発言いただきたい。

【齋藤委員】

広域観光連携という言葉が先程出た。28ページの取組の方向性の中で、どこに入るかと考えたとき、なかなか当てはまらないようだが、あえて言えば受入環境の整備・充実のところだと思う。この取組の方向性は、観光マインドのボトムアップを大きな基礎としていて、B、C、Dと書かれているが、ある他市の基本方針では、最初に、魅力の創出や、観光資源のさらなる磨き上げと活用、ブランドの確立、といった項目があるため、受入環境の整備という視点だと、少し弱いような気がする。例えば、AとBの間にもう一つ、魅力の創出といった項目を掲げ、その中で広域観光連携などを記載していくことがあってもよい。

【丁野委員長】

ここはもう少し丁寧に記載していただきたい。その中に、広域連携の話も必要になってくるし、今日の意見を踏まえてもらいたい。

その他の意見はどうか。

【平原副委員長】

第1章と第2章があるが、第2章は付属編や資料編のようにすると、全体がもっとコンパクトになるのではないか。ぜひ読んでもらいたいというものを第1章で記載し、第2章はサブ的に、副読本のようにするとよい。渡す人には第1章は読んでもらいたい、第2章はさらに興味のある人向け、という作りにした方がいいのではないか。全体としてこのビジョンは、市民、事業者目線でいろいろな人が読み、理解してもらおうということが一番のミッションであるとするれば、データは参考資料という扱いでもいいのかもしれない。

【丁野委員長】

最後の編集の部分の意見であるため、事務局に渡したいが、委員も多くはそう感じていると思われる。

他に意見がないようなので、事務局から連絡がある。

【小池副課長】

※事務連絡

【丁野委員長】

4回の委員会、突貫工事のようであり、その一方で多面的に意見もいただき、ここまで持ってくることができた。細かな詰めのところや、これから先の具体的なアクションプログラムという話もあるので、これからさらに事務局を含め頑張っていたいただきたいが、この委員会としてはこれで終了としたい。

それでは事務局へお返しする。

【市川部長】

・閉会のあいさつ

9 問合せ先

産業観光交流部観光交流推進課企画係 TEL : 025-526-5111 (内線 1815、1816)

E-mail : kanko@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。